

1937(昭和12)年の盧溝橋事件が発端となり始まった日中戦争から、1941(同16)年開始の太平洋戦争を通して、学校生活にも戦時下の世相が色濃く反映されていきます。

そのころ学校に寄贈された絵画には、戦時色がしばしば見られます。総動員体制下で、画家は「彩管報国」(彩管は鉛筆のこと)というスローガン

の下、戦地における兵士の様子などを描いたり、戦争に臨む国家の象徴として旭日や富士、桜などを題材にしたりしています。美術がプロパガンダ

と同じ図様になっていま描かれました。「隼鷹」

の地区の初音中(現在や横山大観も執筆寄贈した「雄飛報国」や東京高等工藝学校に委嘱されたと考えられます。こうした作品からは、戦時下における学校の様子うかがえます。

## 画家にも時代の影響

国民を一体とし戦争体制に協力させるための運動で、政府では数種類の学校は学区住民が集ま

す。国民を一体とし戦争体制に協力させるための運動で、政府では数種類の学校は学区住民が集ま



写真1、竹内栖鳳原画「雄飛報国之秋」(1937年、元初音中蔵)



写真2、国民精神総動員運動のポスター

帝 国 政 府

(京都市学校歴史博物館 学芸員 森光彦)

今回紹介した「雄飛報国之秋」は9月3日~10月1日まで学校歴史博物館(下京区)で展示しま